

三重の誇り。地域に尽くした先人たち

三重県には、時代ごとに、さまざまな分野で多大な功績を残した偉人たちが数多く存在します。

今回は、その中でも近代・現代を中心に、地域のために尽くした先人たちを紹介します。資料館・記念館や旧宅などを訪ね、その足跡をたどれば、先人たちからのエール（声援）が聞こえてくることでしょう。

*各施設に関しては、休館日・開館時間・料金・受け入れ方法・人数などに違いがあり、状況に応じて休館・閉館している場合があります。事前に必ずご確認ください。

取材・文：中村 真由美 中村 元美 堀口 裕世
撮影……梅川 紀彦 尾之内 孝昭
ただし※印の写真は取材先から提供していただきました

取材 撮影は10月中旬〜11月上旬に行いました



「幽静館」外観（員弁郡東員町）



祖父、父の意志を受け継いだ地域住民との深い絆
木村 俊夫（1909～1983）
【員弁郡東員町】



東員町役場を訪ねた人は、庁舎前に立つ銅像に気づくでしょう。

名譽町民第1号で、町民に慕われた木村俊夫の在りし日の姿を彷彿させる像は、昭和59（1984）年に建立されました。

長年にわたって国政に尽くし、内閣官房長官・外務大臣などを歴任した俊夫の足跡を知るには、旧木村邸跡地に建つ「幽静館」がおすすめです。館内には、俊夫に加えて祖父・誓太郎（1847～1919）、父・秀興（1872～1941）の足跡も紹介されています。

最初に目に留まるのは、誓太郎の功績。政治家として県政や国政に尽くした一

方で、地域の

農事の発達・

産業の開発に

も努力を惜し

みませんでした。

私費を投

じて板橋を架

けたり、机な

どの教育備品

を寄付したとい

います。そのため、地域

住民からも深く信頼されていま

した。続いて秀興についても、国政に携わ

った後、地元で産業組合を経営して組合長

として活躍したことなどが紹介されて

います。中でも特筆すべきは、小作人の

保護に配慮したこと。小作人が風水害

や災厄にあった際には、被害の程度に応

じて見舞金を出したとい



「幽静館」内の展示風景

の関係は良好で、強い絆で結ばれていたのです。

こうした祖父と父の意志を受け継いだ俊夫も、誠実で気さくな人柄でした。それは、地域の人から「先生、お元気で」といわれ、「たのむ

に俊夫と呼んでく

れ」と方言で答え

たというエピソード

からも伝わりま

す。館内には、エ

ジプト・インドな

どの各国要人から贈られた食器類・ろう

そく立てなども展示され、政治家として

活躍した姿も偲ぶことができました。

「政治に人格を」のモットーのもと、12

回も衆議院議員に当選したのは、地域住

民との長年にわたる深い信頼関係の賜

物だったのでしょうか。

お問い合わせ

「幽静館」（土・日・祝日開館。無料）

東員町総務課総務管財係

TEL 0594-86-2800



各国要人からの寄贈品



人の喜びはわが喜びを貫き、橋づくりに生涯を捧げた
前川 定五郎
 (1832~1917)
 【鈴鹿市牧田地区(平田)岡田弓削算所・申斐大池(阿古曾)】



「前川定五郎資料室」内で再現された渡し船の様子

鈴鹿市内を流れる鈴鹿川に架かる8つの橋の中に、1つだけ人名が付いたものがあります。定五郎橋です。実はこ

の橋には、人々が喜ぶ姿を見て、自分のことのように喜んだ、前川 定五郎の物語が秘められているのです。

物語を知るために「前川定五郎資料室」を訪ねると、「前川定五郎翁顕彰事業委員会」委員長の井上 敏雄さんと副委員長 的田 雅也さんが温かく出迎えてくれました。同委員会は「牧田地区地域づくり協議会」メンバーによって、平成26(2014)年に設立され、定五郎の功績をアニメで紹介するDVD「定五郎物語」制作や、小学生を対象にした作文コンクール、純米吟醸「定五郎物語」の米づくりなどを行ってきました。



DVD「定五郎物語」

この日も同DVDを視聴します。すると、決して裕福ではない定五郎が、鈴鹿川の往来に困っている人々のために、何度も困難に立ち向かった経緯がわかりました。まず、私財を投じて渡し船用の小舟を購入。その舟を甥と2人だけで血がにじむ思いをして運んだにも関わらず、乗船料はもらいませんでした。次に、橋を架けるために必死で寄付金を募ります。明治29(1896)年、最初に架けた板橋が、わずか1か月で大雨に流された際には、寄付金に加えて自分の田畑を売って2度目に着手。翌年、長さ12メートルあまりの橋が完成します。しかし、定五郎は満足しませんでした。さらに多くの人々が安心して渡れるようにと、大規模な橋づくりに奔走するのです。長さ245メートルの立派な橋が完成したのは、同41(1908)年のことでした。

橋づくりに生涯を捧げた定五郎の物語を視聴し終わると、ほのぼのとしたタッチの絵柄と、地元住民が務める声優

の名演技もあり、じんわり胸が熱くなるのを感じました。

資料室内には、定五郎が購入した舟の底板や遺品の数々に加えて、写真パネルも展示。中には3回目の橋の完成式の様子を撮影したものもありました。この3回目の時に、当時の鈴鹿郡郡長の提案で「定五郎橋」と命名されたのです。定五郎は、86歳でこの世を去る日まで橋を見に行き、点検・修理する日々を過ごしたのです。

「定五郎翁のことを、より多くの人に知ってもらいたいです」と話すのは、



現在の定五郎橋



明治41(1908)年に完成した橋と、定五郎※



「前川定五郎翁写真パネル・ぬり絵展」

もらうと、「何事もあきらめず最後までやりぬくことやひとのために力を出すことができるような人に、成長していきたいです」「少しでもたくさん良いことをして、みんなが笑顔で『ありがとう!』と言ってくれるように、がんばりたいです」などの言葉があふれていました。定五郎の想いは、子どもたちに着実に届いているのです。

お問い合わせ

「前川定五郎資料室(牧田小学校内)」
 (土・日・祝日公開。見学日の3日前までの平日に要予約)

鈴鹿市文化スポーツ部 文化財課
 TEL 059-382-9031



定五郎橋近くの堤防沿いに建つ「定五郎顕彰徳碑」



時代に先行する経済センスと福祉の精神

原田 一郎 (1849-1930)

【松阪市殿町】



「原田二郎旧宅」

年を社会福祉に捧げた原田二郎の旧宅があります。案内をお願いしたのは、「旧長谷川治郎兵衛家」「旧小津清左衛門家」と、この旧宅の館長を務める、NPO法人「松阪歴史文化舎」の松本吉弘さん。「豪商のまちとして知られる松阪ですが、城下町であり、武家の文化も息づいています」と、松阪の魅力が多面的に語られます。

原田二郎は、嘉永2(1849)年、この家に生まれました。父の清一郎は紀州和歌山藩の松坂奉行所に勤める同心。武家らしく質実剛健を旨とし、幼少期から「天下の富は私すべきではない」と諭されて育ったそうです。藩の松坂学問所で学び、数え年17歳(以下年齢はすべて数え年)で藩に奉職しますが、時は幕末の動乱期。20歳のとき明治維新を迎

え、勤王家・世古延世に随行して京都へ向かうなどしています。廃藩置県の実施された明治4(1871)年、二郎は東京に出て英語や洋学を学びます。

27歳で大蔵省に入った二郎は、31歳のとき、横濱第七十四国立銀行の頭取に就任します。異例の大抜擢といえるでしょう。続けて東京貯蓄銀行頭取なども務め、銀行家としてその力量を発揮しますが、やがて体調を崩して銀行を辞し、帰郷します。東京での入院生活を含め、療養には十数年を要しました。この頃の二郎は、中央財界の要職を断り、歌人・佐々木弘綱に師事して和歌に親しんだそうです。

明治33(1900)年から、二郎は鴻池銀行(後の三和銀行)に入り、政治家・井上馨の要請により、鴻池家の財政を立て直すための改革に辣腕を振ります。鴻池家再建だけでなく、韓国銀行設立委員などを歴任し、桂内閣に公債償還基金制度を献策して容れられるなど、経済界で重みを増してゆく二郎でしたが、その最中、明治37(1904)年には父を、翌

年に母を、更にその翌年には妻の節枝を亡くします。子もなく孤独となった二郎は、その後も久原財閥の副監督など要職を重ねながら、戦争や天災で困窮する人々に何度も多額の寄付をしています。

64歳で再婚した妻の栄子とも5年後には永別し、この年、二郎は鴻池家の監督を大隈重信に譲り、翌年には全てを辞して、社会福祉の財団創設に向けて動きはじめます。大正9(1920)年、財産1020万円(現在の約150億円相当)を全て寄付し、これを基金として「原田積善会」を設立しました。時の首相・原敬は二郎の思いに感じ、申請から10

日余りという異例の速さで許可を發したということです。

子どもや有意の若者に学問の機会を与え、社会のセーフティネットをつくるため、日本学士院への寄付、病院や障害者施設の建設、学校給食の実施など、その活動は多岐にわたります。約10年間、二郎はこの会の運営に当たり、昭和5(1930)年、82歳で永眠しました。

二郎は生前、資金を運用してその利益を福祉に用いるための試算「長期複利補給人員積算書」をつくりました。「原田積善会」はこの精神に添って資金運用がなされ、今も公益財団法人として東京都

世田谷区に本部を置き、幅広い活動が続けられています。

原田二郎旧宅は、二郎が生まれた頃に建てられた武家屋敷で、丸窓のある二階部分は二郎が銀行頭取を辞して帰郷した際に、書斎として増築したものの。平成21(2009)年に「原田積善会」から松阪市に寄贈され、有形文化財に指定、復元整備を行いました。現在は、「松阪歴史文化舎」により管理・運営され、一般公開されています。

お問い合わせ

NPO法人「松阪歴史文化舎」
TEL 0598-21-8600



昭和10(1935)年に撮影された原田邸の門



2階の書斎から中庭を臨む



玄関横の居間と客間



門から庭へと続く飛石を配した露路(ろじ)



伊賀近代化の立役者、風景保護にも力を注いだ、電気の善助さん 田中 善助 (1858~1946)

【伊賀市】

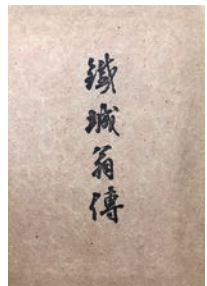


岩倉峽
「旧岩倉発電所跡」を示す立て看板



助翁が関わっています」と教えてくれるのは、伊賀地域の文芸誌『伊賀百筆』編集長の北出 樞夫さん。『伊賀の郷土史あれこれ』などの著書も多く、歴史・文学に精通する北出さんに話を伺うと、善助の先見性やスケールの大きさ、実行力には驚くばかりです。

関わった主な事業だけを挙げてても、岩倉発電所に加えて比奈知川水力発電所などの電力事業、伊賀貯蓄銀行の設立、伊賀軌道(現在の伊賀鉄道)敷設、神原温泉の復興など、枚挙にいとまがありません。さらには、大正13(1924)年に、当時の上野町長に就任して下水道築造事業を進めた際には、不足分を自ら寄付したといえます。後に自伝『鐵城翁傳』の中で、「滅私奉公の精神で仕事をした」と書いた通り、腸チフスなどの伝染病に苦



『鐵城翁傳』復刻版

しむ町民のために心血を注いだことが伝わります。時の内務省土木局長は、「恐らく日本中で上水道より先に下水道工事を手掛けた都市は他に無いだろう」と、その先見性を褒めたといいます。

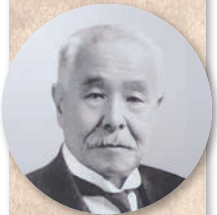
こうして近代化事業を進める一方で、善助は奈良県の月ヶ瀬などの風景保護にも力を注ぎました。明治25(1892)年、当時の帝国議会に「風景保護」の請願をしましたが、実はこれは、日本初の風景保護の請願だったといわれます。

「善助翁のような人は、今の時代に必要な人材でしょう」と北出さん。没後75年を過ぎた現在も、その偉業は色褪せることはないでしょう。

お問い合わせ

「伊賀百筆」編集委員会

TEL 0595-211-2145
(北出 樞夫さん)



「ボーイ教師」と呼ばれた俊才、実業界でも活躍 門野 幾之進 (1856~1938)

【鳥羽市鳥羽】



幕末、鳥羽藩の家老の家に生まれた門野幾之進は、教育者であり、千代田生命を創立した実業家。鳥羽駅近くの生家跡に

は「門野幾之進記念館」があります。「門野家に伝わる刀や鎧、調度品など、ゆかりの品が展示され、幾之進の生涯とその功績を知ることができます。養殖真珠の御木本 幸吉、鳥羽商船高専創始者の近藤 真琴と並び、鳥羽の三賢人として尊敬されています」と鳥羽市教育委員会

の豊田 祥三さんが案内してくれました。



“ボーイ教師”と呼ばれた頃

幼少の頃から西洋の地理や物理、オランダ語などを学び、明治2(1869)年に上京。藩からの推薦を受けた貢進生として慶応義塾に入ります。福沢諭吉に師事し、「文才穎敏」と称えられ、わずか2年後、15歳にして英語教師として教壇に立ち、「ボーイ教師」と呼ばれました。学者として活躍した後、国会議員を経て実業界に進出。明治37(1904)年に千代田生命保険相互会社を創立して社長に就任したのを皮切りに、第一機関汽罐保険、日本徴兵保険、千代田火災保険、千歳火災海上保険を次々に創立。

実業家として成功をおさめ日本の保険事業にその名を遺します。また、昭和3(1928)年には苦境に陥った時事新報社の会長に就任し、私財を投じて再建に導きます。

一方、郷土の教育振興にも尽力。「鳥羽の子どもたちに本を送ったり、学費援助の奨学金制度を創設するなど、郷里に心を注ぎ、その熱意は靄溪奨学会が引継ぎ、学校図書購入費の寄付が今も続けられています」と豊田さん。「靄溪」は幾之進のイニシャル「I・K」に由来する雅号です。大気中の靄が集まって溪流となり、やがて大海へ広がるようにとの想いは、幾之進の数々の努力が実を結ぶ様と重なります。



生誕地に慶応義塾の学長でもあった小泉 信三氏の文による石碑

お問い合わせ

「門野幾之進記念館」

(鳥羽市歴史文化ガイドセンター)

TEL 0599-251-8255



地方分権運動の先頭に立って活躍した七保村村長

大瀬 東作 (1885~1938)

【度会郡大紀町野原】



東作ゆかりの品々を展示



「野原農村公園」に立つ銅像

藤の花が見頃を迎える季節に、義務教育と地方自治の先駆者といわれる大瀬東作を偲ぶ催しが開かれています。この「東作さんと藤まつり」は24回を数え、会場は東作の銅像がある大紀町の「野原農村公園」。清流宮川が流れるのどかな農村から、国政を動かす人物が輩出されています。

地方自治に尽力。大きな業績が義務教育確立のための教員給与改善です。当時の義務教育制度では、小学校教員給与に対する国の負担はごくわずか。そのため財政力の弱い町村では、財政の半分を教育費が占めるほどで、七保村も例外ではありませんでした。東作は教育に対する熱意から「義務教育の経費はすべて

国家が負担するべき」と、全国の町村長に呼び掛けました。大正10(1921)年には「全国町村会」を発足させ、国庫負担の増額運動を開始し、ときに北海道など全国を駆け回りました。その運動によって国の負担額は4倍に増加し、東作が設立に関わった「全国町村会」は、現在も国に支援を訴える地方の協議会として受け継がれています。

「東作さんは第一次大戦で弱っていた国民に希望の光を与えた人物。地方分権運動を推進した彼のおかげで、田舎の声が中央に届きやすくなったんです」と、「大瀬東作顕彰委員会」代表の山口彰芳さん。顕彰委員会は東作の生涯を一冊の絵本「東作さんの架け橋 大瀬東作物語」として企画出版し、町内の小学校にも配布しました。

東作の足跡を辿るには、旧七保小学校跡の「野原工房げんき村」にある資料館を訪ねるのがよいでしょう。日記や手紙など、実際に使用していたものを中心に、写真なども展示され、当時の村の様

子や東作の人物に思いを巡らせることができます。憲政の神様と呼ばれた尾崎行雄から送られた額縁が掲げられ、浜田国松や浜地文平ら郷土の政治家との交流が文通に残されています。熱心な読書家だった東作の本棚には、政治や宗教、農業に科学と幅広いジャンルが並んでいます。

そんな地域の偉人について、より広く知ってもらおうと、平成29(2017)年には東作の生家が民泊施設「東作塾」として生まれ変わりました。親族から建物が寄贈された当時、野原区長でもあった山口さんは、築130年を超える日本

家屋の公開に向けて検討を重ねてきました。庭の木の整備などには住民をはじめ、たくさんの人が手伝ってくれたようです。民泊施設としてオープンしてからは、台湾の中学生、ベルギーからの一人歩き旅、スリランカなど各国から宗教色も多彩に利用されました。現在の運営は「大紀町地域活性化協議会」が担っています。

玄関には吊り橋の写真が飾られています。宮川溪谷に架橋することは東作の夢であり、村民の念願。実現のために心魂打ち込み、構図を考え、設計を研究し、ついに昭和5(1930)年に旧野原

橋を完工します。村長の職を辞してからは、農業経営に身を投じ、農業発展に力を注ぎ、愛郷の事業に尽瘁しました。晩年は「山中無名の読書子になる」と言った通り、静かな読書の日々を過ごしたようです。8畳の和室に掛けられた「晴耕雨読楼」の書額が、東作の勤勉さを物語っています。

お問い合わせ

「大瀬東作顕彰委員会」
TEL 090-3951-8776
(山口 彰芳さん)
「大紀町地域活性化協議会」
TEL 0598-74-2277



「野原工房げんき村」(土曜営業)



「大瀬東作資料館」内の展示風景



広い庭のある民泊施設「東作塾」



野原橋建設は東作と村民の強い念願



オブラートを発明し、日本だけでなく世界に供給

小林 政太郎 (1872~1947)

【度会郡玉城町】



明治35年に
専売特許を得る※



オブラート発明につながった真
ちゅう製の鉄瓶。箱に政太郎自
筆の由来が書かれる※

苦い薬を薬に
飲める方法は
ないかと、柔
かいオブラー
トの製作に取
り組みます。
当時のオブラ
ートはドイツ

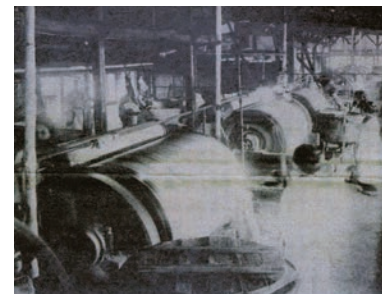
小林 政太郎はオブラー
トを発明した人物です。今
でこそ薬は服用しやすいカプセル状や
錠剤ですが、かつては粉薬で苦く、と
くに幼児や老人にとって苦痛なもので
した。

小林家は田丸(現玉城町)で代々薬屋
を営み、漢方医だった父・藤十郎を追う
ように政太郎も医師を志し、15歳で上京。
済生学舎(現日本医科大学)で学び、弱冠
18歳にして医師開業試験に合格します。
21歳で郷里に戻って開業し、診察の傍ら、

製の厚く固いもので、水に長く浸して柔
らかくしたうえで薬を包み、手間の掛か
るものでした。

政太郎は、米を炊くときに釜からこぼ
れるデンプン膜にヒントを得ます。原
料を試行錯誤した末に、寒天を混合し、
均一で丈夫、かつ透明な膜をつくりあげ
ましたが、これを剥ぐことができません。
あるとき、鉄瓶にこぼしてしまった溶液
がきれいに剥がれたことから、理想のオ

ブラートの
工程が完成
します。専
売特許を得
るとともに、



※ スチームドライヤー装置で量産を可能に

「合名会社
小林柔軟オ
ブラート製
造所」を自
宅裏に設立し、百人以上を雇って、オプ
ラートの手焼き製造を開始。増加する
需要に応じるため、ボイラーの蒸気によ
る乾燥と製品の巻き取り式で量産にも
成功します。海外でも特許を取得し、明
治37(1904)年には万国博覧会で銅
牌、明治43(1910)年、日英博覧会で
金牌を受賞するなど、柔軟オブラートが
一挙に世界へと広がっていきました。
会社は、特許期限が切れる昭和8(19
33)年ころまでが最盛期。その後は研
究開発する事業者が現れ、また戦時体制
で輸出に必要なブリキ缶が使用できな
くなり、工場は昭和12(1937)年に閉

鎖し、医師としての晩年を過ごします。
玉城町の街道沿いに政太郎の生家が
あります。この近くに、大正4(191
5)年、政太郎は孔子廟を建立し、儒教思
想の普及、啓蒙に努めました。今はその
場所に、蔵と有志65人が建立を祝って寄
贈した記念碑が残されています。



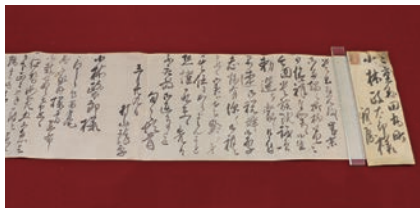
孔子廟のあった場所に
記念碑が残る



伊勢本街道沿いに建つ政太郎の生家

政太郎の孫にあたる小林厚さんが、
文献を集めて『オブラート発明者小林政
太郎・資料集』を平成21(2009)年に
発行します。厚さんが7歳の時に政太
郎は他界していますが、残された資料か
ら新たな発見もあったようで、地元との
つながりを大切に、小学校に遊具や楽器
を寄贈したり、毎年旅回りの曲芸団を招
いて町民に開放したりというエピソード
が綴られています。なにより町医者
として診察を続け、膨大な患者さんのカ
ルテを残したことに心打たれます」と厚
さん。

「村山龍平記念
館」には、朝日新聞
創始者の新聞王・村
山龍平から政太郎
への書簡が展示さ
れています。玉城
町を代表する偉人
が、激動の明治・大
正、昭和とともに生
きた証です。



祝辞を送った政太郎へ村山龍平から返答



田丸の幕末を生きた
家老であり文化人
金森 得水
(1786~1865)

江戸時代後期、田丸城主・久野家の
家老を務めた金森 得水は、経済の道
に精通し、藩政に功があった人物です。
藩内の荒地を開拓奨励し、田丸物産所
を設立したことが実績として挙げ
られています。財政を立て直そう
と岩出地区に新田を開墾し、茶や桑を
植えて農業振興に努めました。

また茶人や書家としても名高い得
水は、京都から
一流の職人を呼
び、茶室兼別邸
を建築します。
現在、「玄甲舎」
として一般公開
されています。



「玄甲舎」の茶室

お問い合わせ

玉城町教育委員会(村山龍平記念館)内
TEL 0596-15818212

※印の写真は取材先から提供していただきました